PROGRAM

序奏と華麗なるポロネーズ	ショパン
無伴奏チェロ　組曲 第5番	バッハ
アダージョとアレグロ	シューマン
チェロ・ソナタ	フランク

四季のコンサート　夏

1985年6月25日(火)PM6:30
浜松市民会館大ホール
主催：浜松音楽友の会

プロフィール

上村　昇（かみむら のぼる）

1975年　京都市芸大卒業。 岡沼俊太氏に師事。
京都音楽協会賞受賞。
第44回 日本音楽コンクール第3位。
1976年　第23回 文化放送音楽賞受賞。
1977年　第2回 京都市芸術新人賞受賞。
第46回 日本音楽コンクール第1位。
毎外民放コンクール松下賞受賞。
1979年　デビューリサイタル（東京・草間）
ハーウアー・ウィビロ教授（ウィリアモ音楽院）に師事。
現在、「若い学のコンサート」でN響と初共演、つづけて福岡記念リサイタルで華々しいデビューを飾る。
数々のリサイタル、オーケストラとの共演で活躍を展後活動を行うオーガ、座談啓子、細米ゆず子、上村昇らの三重奏でも好評を得、若手ピアニストの第一人者としての地位を確立。
1980年　帰国。リサイタル、協奏曲、浜内楽に本格的な演奏活動を開始する。
1983年、第9回日本ショパン協会賞を受賞している。

清水和音（しみず かずね）

4歳よりピアノを始め、65年より桐朋学園「子供のための音楽教室」に入り、三浦敬子氏に師事。その後、三浦容氏に師事し、76年に桐朋女子高校音楽科入学。在学中、第47回音楽コンクールで第3位に入賞し後、80年から ピ ッ ク ス ー ア 音楽院に留学、ハイ・ドルトフ ラ ン ク氏に師事
1981年、パリで開催されたロン・ティボー国際コンクールで第1位をうけリサイタル賞をあわせて受賞し、内外の大きな話題を呼ぶ。
帰国後、「若い学のコンサート」でN響と初共演、つづけて福岡記念リサイタルで華々しいデビューを飾る。
数々のリサイタル、オーケストラとの共演で活躍を展後活動を行うオーガ、座談啓子、細米ゆず子、上村昇らの三重奏でも好評を得、若手ピアニストの第一人者としての地位を確立。
1983年、第9回日本ショパン協会賞を受賞している。

秋のコンサート	10月25日(金)	PM 7:00	ミュジック・ペロウ　ピアノリサイタル
冬のコンサート	12月12日(木)	PM 6:30	東京カンマー・アカデミー　室内楽のタベ

上村　昇
清水和音　のタベ

序奏と華麗なるポロネーズ　　ショパン

ピアノの詩人ショパン（1810～1849）は、ピアノ以外の楽器としてはチェロを好み、ピアノ・トリオやチェロ・ソナタも含めて4曲のチェロを使った室内楽曲を残している。

このポロネーズもそのひとつであり、1829年の秋から翌年春にかけて作曲された。　曲はレント・ハ長調4/4拍子の序奏と、アレグロ・コン・スピーリト、ハ長調3/4拍子によるア・ポラッカ（ポロネーズ）からなっている。なおこの曲は、当時の名チェリスト・メルク（1795～1852）に捧げられた。

無伴奏チェロ　組曲　第5番　　バッハ

バッハ（1685～1750）は、1717年32才のときから1723年38才のときまで、ケーテン宮廷につとめ、楽長として働いた。ケーテンの領主レオポルドは自らガンバやチェンバロを奏する音楽愛好家であり、それゆえケーテン宮廷オーケストラには各地から優れた音楽家が集められていた。したがってバッハは、この優れたメンバーを擁するオーケストラや団員達のために、このケーテン時代には数多くの器楽曲を書いたのだった。ブランデンブルク協奏曲や管弦楽組曲、ヴァイオリン協奏曲、ヴァイオリンやチェロのための無伴奏曲といったバッハの器楽曲の名作のほとんどはこのケーテン時代に創られており、この時代はバッハの「器楽曲時代」ともいわれて

無伴奏チェロ組曲（全6曲）は、確定的な作曲年月日は不明だが、様々な考証調査の結果、無伴奏ヴァイオリン曲（全6曲）に引き続いて1720年から翌年にかけて作曲されたと考えられている。そして6曲のヴァイオリン曲を第1集とし、このチェロ組曲を第2集とするという記述もバッハの妻マクダレーナの筆によって残されており、このヴァイオリンとチェロの無伴奏曲は計12曲のセットとして書かれた、とも推測されている。無伴奏ヴァイオリン曲全6曲は、ソナタが3曲、パルティータ（組曲）が3曲からなるが、無伴奏チェロ曲全6曲は、すべて組曲という形がとられている。そしてこの全6曲の無伴奏チェロ組曲は、各々、前奏曲／アルマンド／クーラント／サラバンド／メヌエットがブーレかガヴォット／ジーグという6曲からなっている。その内サラバンドの後にメヌエットを配したのは第1番と第2番、ブーレを配したのは第3番と第4番、ガヴォットを配したのは第5番と第6番であり、ヴァイオリンのパルティータより、いくぶん保守的な組曲づくりが目指されていると言ってよいと思われる。

ここで演奏される第5番（BWV 1011）はA線を一度下げて調弦されるように作曲された。これは演奏し易くするためと考えられるが、演奏技術がヴァイオリンなみ、と言える域にまで発達した現代では、普通の調弦で演奏される方が多くなった。本日、上村も普通の調弦によって演奏する。曲はハ短調で書かれている。そしてそれゆえか、暗く運命的な厳しさが込められているようにも思える。前奏曲／アルマンド／クーラント／サラバンド／ガヴォット／ジーグからなる。

アダージョとアレグロ　　シューマン

この曲は元来、ホルン（F管）とピアノのために1849年2月、シューマン（1810～1856）38才のときドレスデンで作曲された。しかしホルンの代りにチェロまたはヴァイオリンで奏してもよいということになっており、現在では、特にチェロ曲として演奏される方が、むしろ多くなって来ているように思われる。初演は作曲された年の3月2日にドレスデン宮廷のホルン奏者とクララとで、まず非公開で行われ、翌年1月26日に、やはりドレスデンでクララと、シューベルトというヴァイオリニストとで公開初演された。作曲アダージョ（変イ長調4/4拍子）と、アレグロ（変イ長調4/4拍子）とからなり、アレグロ部は3部形式がとられている。

チェロ・ソナタ　　フランク

フランク（1822～1890）が生きた時代は、フランス音楽界はどちらかというとパレエ音楽など劇音楽が盛んに創られ演奏されていた。ベートーヴェンの交響曲ですら演奏されることは極めて稀なことだったという。しかしフランクは、あくまでも純粋音楽を創ろうとしていた。そして純粋音楽のすばらしさを世人に知ってもらおうという目的をもってフランス国民音楽協会を創立し、積極的に音楽会を開いたりしたのだった。そしてそんな努力がようやく認められたのは、フランクが50才になってからであり、それゆえかそのころから68才で没するまでの間に、フランクの傑作は集中するのである。

このソナタは1886年フランク64才という晩年に、ヴァイオリン・ソナタとして作曲された。当時フランクは、フランクと同様ベルギーのリェージェ生まれのヴァイオリニスト、ウジーヌ・イザイ（1858～1931）と親交を結んでいたが、この曲は同年9月26日のイザイの結婚日に、お祝いとしてイザイ夫妻に贈られたのである。したがって初演はイザイおよびイザイ夫人（1858～1924）によって行われている。イザイ夫人はダンディの名作「フランス山人の歌による交響曲」初演の折にもソリストをつとめた優れたピアニストであり、それゆえこのソナタも、ピアノ・パートが極めて魅力的に書かれている。なおこの曲は前記の如くヴァイオリン・ソナタとして作曲されたものであるが、現在では本日のようにチェロ・ソナタあるいはフルート・ソナタとしても、しばしば演奏されている。曲は次の4つの楽章からなっている。

第1楽章　アレグロ・ベン・モデラート。ピアノに誘われて弾き出されるチェロの漂ようような第1主題がこの曲全体を支配していく。この曲はこの主題を基にした循環形式で書かれている点が、ひとつの大きな特色としてあげられる。

第2楽章　アレグロ。この曲全体の中で最も激しく情熱的な楽章である。

第3楽章　レルタティーヴォ～ファンタジア。極めて自由かつユニークな楽章であり、レチタティーヴォの部分もファンタジアの部分もドラマティックなものが込められている。

第4楽章　アレグレット・ポコ・モッソ。清澄な響きで開始されるが、徐々に熱さを増していき、最後は華やかな様相を呈して終る。

（曲目解説　　長谷川武久）